

キツは行方不明になった

Kevin Knight

キツが二十一歳のとき、行方不明になった。両親は名古屋へ飛んだ。キツが暮らしていた街だ。しかし、成人した子どもの姿はどこにもなかった。失望しながら家へ戻った。

それから間もなく、家に幽霊が現れた。幽霊はキツの姿をしていたが、その動きは奇妙だった。ぎこちなく、ゆっくりと身体を回しながら歩いた。腕を振ることはなかった。その動きのすべてが遅く、慎重だった。表情は決して変わらず、笑顔もなければ、声をあげて笑うこともない。目の間にかすかな苛立ちのしわが刻まれている以外、顔には何の感情も浮かんでいなかった。窓の外を眺めているときも、両親を見つめているときも、まったく同じ無表情だった。

幽霊は毎日、淡々と生活を続けた。壁を通り抜け、物を動かすこともできた。朝早くに起きて朝食を作り、一時間ほど近所を歩いた。

近所の人々にも幽霊の姿は見えていた。帰宅すると、キツの古い寝室のソファに腰掛け、何時間も床を見つめていた。スケッチブックを取り出し、じっと眺めた。カラーマーカーを手に持ち、紙の上にかざした。しかし、両親が開いたドアの前を通ると、すぐにブランケットの下へスケッチブックを押し込んだ。キツが愛した猫は、幽霊の隣に静かに座っていた。ただ、じっと待っていた。しかし、幽霊は興味を示さなかった。猫を見ることもなければ、毛を撫でることもなかった。どんな動物も、幽霊の注意を引くことはできなかった。道歩く犬にも目を向けなかった。ある日、幽霊が皿を洗っているとき、二匹のリスが窓辺に現れた。一匹が直立し、小さな手を窓にそっと当てた。しかし、幽霊は視線を向けることなく、皿を洗い続けた。幽霊はほとんど話さなかった。「何を考えているの？」と、キツの母親は尋ねた。

長い沈黙のあと、幽霊は言った。

「引っ越しが楽しみだ」

あるいは、

「運転するのが楽しみ」

または、

「一人で暮らしたい」

あるいは、

「もう病院には戻らない」

幽霊が発する言葉は、それだけだった。長い間、考え込むように沈黙したあと、短く答える。それ以上の問いかけには、苛立ったような視線を向けるばかりだった。キツの母親は、幽霊とにらみ合うことが増えた。幽霊は会話をする能力があるのではないか。しかし、それを拒んでいるだけなのではないか。そう思うと、胸が締め付けられ、悔しくなった。

だが、諦めるわけにはいかなかった。

「お母さんも、あなたが一人暮らしできるようになってほしい。でも、本当にできるのか、話しどこに住むの？ 何を考えているのか、話し

てくれない？」

幽霊は答えなかった。

「猫がいなくなったら寂しくならない？ 一

緒に連れて行きたい？」

幽霊はしばらく考えた後、

「一人で暮らしたい」

と、ようやく言った。

キツの母親は思った。

キツは私がいなくて寂しくなるだろうか？

キツの幽霊は毎日同じ服を着ていた。黒い靴

下と黒い靴。黒いショートパンツに、ゆった

りとした黒いシャツ。それから、野球帽。

黒い靴下のまま寝る。数日に一度、シャワー

の音が聞こえたが、浴室から出てきたとき、

その髪はまったく濡れていなかった。水は幽

霊を濡らすことなく通り抜けるのだろうか？

シャワーの後も、必ず同じ服をそのまま着て

いた。

「ちゃんとシャワーを浴びなきゃ、誰も友達
になってくれないよ」と、キツの両親は懇願

した。

もちろん、幽霊が友達を作るには、それ以上に深刻な問題があった。他の幽霊はいるのだろうか？キツの両親は、テレビ以外で幽霊を見たことも、聞いたこともなかった。この幽霊はただキツの昔の友人のところへ行き、

「僕は、シャワーを浴びない人とも友達になれる」と、幽霊は言った。

キツの両親は、夜の散歩に幽霊を連れ出した。港のボートのそばを歩く。アシカが大声で吠え、ふざけ合いながら互いを棧橋から突き落としている。雪のように白いシラサギが、ボートのクロム製の手すりに止まり、首を左右に振っていた。月光が水面に煌めく。キツの両親がその景色に見とれて立ち止まると、幽霊はまるで狭い廊下の中を歩いているかのようになり、目を伏せたまま進み続けた。声をかけても返事はない。追いかけて歩調を合わせなければならなかった。ときどき、キツの母は

ベンチに座り込み、一人静かに涙をこらえてから、再び二人に追いついた。

幽霊は冗談を言わない。これはよく知られていることだ。それでも、キツの父は、かつてキツとふざけ合っていたように、幽霊とも冗談を交わそうとした。山を登った後、小さく勝利を収めたような気持ちで、幽霊にハイタッチをさせた。

「冗談を言ってみろ」と、キツの父は言った。
「ガイコツ」と、幽霊は言った。

「うん」と、キツの父は言った。

「バーに入る」と、幽霊は続けた。

「うん」と、キツの父は相槌を打った。

「ガイコツ。ビール。モップ」と、幽霊は言った。抑揚もなく、ただ「冗談」というものを繰り返しているだけだった。キツの父は何度か頷き、励ますような表情を浮かべた。

「まあ、そのまま受け取ることにするよ」と、キツの母に言った。

ゴーストが何時間も床を見つめているのに耐えられず、キツの母親は色々と提案した。しかし、ゴーストはただゆっくりと首を横に振るばかりだった。

「何かしたくない？」と母親が問いかけた。間。

「例えば？」とゴーストが言った。

「ジムまで車で送ろうか？」

このときだけは、ゴーストは小さくうなずいた。そして、ジムへ向かった。しかし、母親が一緒に入ろうとすると、ゴーストは向き直り、無言で両腕をばたつかせた。

科学者たちは、家族に他のゴーストがいたかどうかを尋ねた。キツの両親は「いない」と答えた。では、キツの祖母は？ それは違う、と両親は言った。祖母が自分の家をしばらく幽霊としてさまようのは、何も不思議なことではない。いずれ旅立つとしても、それは普通のことだ。

科学者たちは納得したようだった―だが、そ

の後、キツの両親は自分たちの答えに少し疑いを持つようになった。

キツの両親が覚えているのは、そんな話だった。しかし、記憶というものは曖昧だ。実際には、キツの両親は名古屋の病院で成人した我が子を見つけていた。キツは「家に帰りたい」と繰り返し、病棟のドアを押していた。科学者たちは退院に反対したが、それでも退院の書類は用意され、署名された。こうして、キツは「行方不明」になった。

ゴーストが最初に現れたのは、名古屋のホテルの部屋だった。鍵もないのに、ドアを通り抜けて入ってきた。いや、キツの父親がドアを少し開けたままにしていたのだろうか？ゴーストはホテルのレストランに現れ、バーにも姿を見せた。そして両親が東京へ帰る飛行機に乗ると、ゴーストは三列後ろの真ん中の席に座っていた。幸いなことに、航空会社

の乗務員はゴーストへの対応に慣れている。

家に戻ると、ゴーストの苛立ちは次第に増していった。

「高山に戻るのが楽しみだ」と繰り返す言うようになった。

「これはまずいわ」と、キツの母親は夫に言った。

キツがゴーストに入れ替わっただけの「安定した状態」でも十分に辛かった。それなのに、その安定すら崩れようとしていた。

キツは以前、高山に住んでいた。大学を辞めた後、小さな町にあるコミュニティ・カレッジに入学したのだ。

両親が考えた計画ではなかったが、彼らもそれを支持した。キツはルームメイトを見つけた。キツの母親はすべてが順調に進むよう手を尽くした。

だが、勉強は難航した。課題は次々に押し寄

せ、教授たちはキツの性別を間違えた。しかも、なぜか必修の統計学の授業が異様に難しかった。それでも、キツは勉強し、ジムに通い、いくつかの単位を取り、いくつかは未完のままになった。編入願書の締切を一日過ぎて提出してしまったのは、必要な書類が不足していたせいだった。

キツの父親が高山を訪れたとき、キツは八時間もの間、一方的に話し続けた。二人は町を歩き回った。フライドチキンの店、展望台、キツのアパート、画材屋――。キツの父親は、もともと黙っていることに慣れていた。それゆえに、キツの止まらない話に強く惹かれた。いったい何を話しているのか？

彼はそのうちの十分間を録音し、後から聞き返してみた。そこには、奇妙な言葉の流れが刻まれていた。

キツはソーシャルメディアでも活発に活動していた。日本中の若者たちがログインし、キツがラーメンを食べる様子を見たり、考えを

ライブ配信するのを聞いたりしていた。キツの母親はアカウントのユーザー名を探し当てたが、投稿やコメントを理解するのは難しかった。そこにあっただのは、天使、魔女、テストステロン、他者化、躁状態、性別違和の話題――。こんなにも多くの人々が、これを理解しているのか？

やがて、また別の事件が起こった。

ある夜、キツはドアをロックし、身を丸めた外ではルームメイトが何時間もドアを叩き続け、意味不明な言葉を叫んでいた。他のルームメイトが間に入り、警察を呼んだ。キツは両親に助けを求めた。

警察とソーシャルワーカーがルームメイトの危険性を評価し、強制的な精神鑑定のために七十二時間の入院措置をとった。キツの両親が理解したのは、「七十二時間」という単語だけだった。

その時間が過ぎる前に、彼らは高山へと急いだ。地元のレンタル会社で引っ越し用のトラ

ツクを借りた。キツの荷物は異様に多かった。
アーモンドバターの瓶だけで八本もあった。
それも、すべて半分だけ使われた状態だった。
キツの父親は考えた――なぜ、四本の空の瓶
ではダメなのか？あるいは、そもそも瓶が一
つも無い状態では？
そんな疑問を抱えながら、彼らは荷物を積み
込み、高山を脱出した。

キツは、一学期だけ家に留まって、状況を立
て直すことにした。ソーシャルメディアで自
身の出来事を記録し、前向きなメッセージを
投稿し、小さな成功を祝っていた。何千もの
感謝や励ましのコメントが寄せられ、それに
応える必要があった。しかし、帰宅してわず
か五日後、キツは「名古屋へ引っ越す」と宣
言した。以前に一度だけ両親が会ったことの
ある友人のもとで暮らすという。名古屋では、
少しずつ連絡が減っていき、やがて、完全に
消息を絶った。

キツの両親は、今や壁をすり抜けるゴーストを見ながら、考え込んだ。

どうしてこんなにも短期間に、これほどのことが起きてしまったのか。

高山は駄目だった。

大学も駄目だった。

山も駄目だった。

名古屋も駄目だった。

そして今、ゴーストは落ち着きを失い始めていた。

ゴーストは毎晩早く寝た。その時間、キツの母親は日中に交わした会話を振り返り、一つひとつの言葉の意味を考え直した。夫は、彼女がそうする理由を理解していた。

「山の中で一人暮らしをしたいんだって」と母親が言った。

「誰だってそう思うさ」と父親が答えた。だが、二人は気づいていなかった。

記憶の中には、無数の穴が空いていた。ゴーストは今、変化していた。けれど、本当は最初から変化し続けていたのだ。

家に現れたばかりの頃、ゴーストの目は大きく見開かれていた。すべてを、隠しようのない不安と疑念の目で見つめていた。開いたドアの前で立ち止まり、まるで考えているようだった。ここを越えていいのか、それとも引き返すべきか。

夕食の席では、箸をいつものように持っていた。だが、動かさなかった。湯呑みを持ち上げ、唇の近くまで運んだまま、じっと固まっていた。父親か母親がそっと湯呑みの底を押してやると、ようやく一口飲んだ。すると、その後は決まって、最後の一滴まで飲み干した。

キツの両親が部屋に入ると、ゴーストが半ば振り向いた姿勢のまま、片足を床から浮かせて固まっていることがあった。どれほどの時間、こうしていただろうか。廊下の真ん中で

行くべきか戻るべきか迷うように立ち尽くし、階段では、片足を一段上に乗せたまま、もう片方の足を下の段に残していた。けれど、やがて無表情のまま、ゆっくりとした反応しか示さない「安定した状態」に落ちて着いた。キツの両親は考えた。名古屋のことを。あの、連絡が途絶えた数か月のことを。何かがおかしくなった。いや、もしかすると、ずっと前から何かがおかしかったのかもしれない。けれど、名古屋では、それが決定的に悪い方向へと向かったのだ。

名古屋で薬をやめることにした。不安には漢方薬を、集中にはアデラールを使う。そうしているうちに、目に見えない力が突然脳を襲った。

「両親が私を誘拐して東京へ連れ戻そうとしている」と、パートナーに告げる。「あの人は私を破壊するために動いている。科学の権威と裏で結託して、私を海外のどこかに

送り込むつもりなんだ。」

両親に医療記録を見せることはなかった。

やがて体のシステムが次第に停止し、話すことをやめた。パートナーと独自の手話を編み出し、しばらくはそれで意思疎通をしていたが、次第にそれも崩れていった。

今、床に横たわり、拳を固く握りしめ、動かない。他の人には、思考が遅くなっているように見えるかもしれない。しかし実際は、その逆だった。頭の中は、かつて高山で父親が見たものよりも、はるかに速い速度で駆け巡っていた。言葉はもはや口から出ることができなかった。

行政が介入する。

保安要員と社会学者が現れる。

別の科学者が書類に署名し、名古屋中央病院へと連行される。

何の罪も犯していない。

個室に入れられ、その外には鍵のかかった扉が並んでいる。仮に一つの扉を突破したとし

ても（それはできない）、その先にはさらに二重のロックがある。スタッフは最初の扉を開け、それを施錠し、それから次の扉を開く。その間に、訪問者が携帯電話や尖った物を預けるためのロッカーがある。最後の扉のすぐ外では、安っぽいプラスチックの椅子に座る警備員が銃を携えていた。

新たな署名が加わり、この時間拘束は再評価される。状況は理解していたが、言葉を発することはできなかった。国家は弁護士をつけた。国家は8ページに及ぶ裁判所命令を部屋に置いていった。

両親はそれを見たが、書かれた言葉の意味を完全には理解できなかった。

弁護士が尋ねる。「裁判で自分自身のために証言をしたいですか？」

答えなかった。口を開くことができなかった。裁判では、判事が拘束期間を延長した。弁護士は説得し、電気ショック治療の延期を勝ち取った。

何の罪も犯していない。
最初の数日間、自室で食事を取り続けた。や
がて、ようやく体が動き、他の非犯罪者たち
と共に食堂に出るようになった。定期的に鍵
のかかった扉へと歩み寄り、体を押しつけた。
母親が面会に来て、手を握ろうとしなかつ
た。訪問時間が終わる直前になって、母の手
を強く握りしめた。母が引き離そうとしても、
離さなかった。暴力を振るったわけではない。
ただ、必死でしがみついていただけだった。
ゆっくりとした動きの中で、社会学者が二
人を包み込み、別の科学者が指を一本ずつ、
慎重にほどいていった。
誰もが理解していた。家に帰りたいことを。
数日後、解放された。ただし、条件があった。
定期的な治療プログラムに参加すること。
パートナーのもとへ戻った。翌日、専門家の
もとへ行った。しかし、何かが違った。
二日後、また床に伏していた。
今回は、名古屋大学病院へと運ばれた。

夜通し救急病棟に留め置かれる。
病室の外では、5代の少女が母親に叫び、母親が怒鳴り返していた。
次に意識を取り戻したとき、「ユニット7B」にいた。
またしても、鍵のかかった空間に。
再び三週間の拘束。
毎日、何かが起こる。しかし、何が起こったのかを整理することができない。
やがて、再び解放される。そして、東京の両親のもとへ送還される。
一週間、何も話さなかった。
動けなくなることが増えた。
トイレにも間に合わないことがあった。
そして、ようやく言葉が出た。
「〇〇と別れたい。」
パートナーがペンを手渡し、二人で大きなポスターを作った。「私を忘れないで。」そう書かれていた。
パートナーは名古屋へ帰った。

そこには、パスポート、携帯、ラップトップがあった。

しかし、それらはもはや、失われたゴーストの残骸の中に埋もれていた。

二度とそれらを見ることはない。

思考が戻り始める。標準速度で再生され、君のために聞き取りやすくなっている。

問題は、人々が君を監視していることだと気づく。

電子アシスタントスピーカーを壁から引き抜く。

母親のスマートフォンも使わない。メーカーが盗聴しているから。

それに、両親の家は間違っている。思い出が多すぎる。

通りを歩けば、スパイたちが君の動向を見張る。

横目で君をうかがい、肩越しに何度も振り返る。

君が彼らを見ているのか？

それとも彼らが君を見ているのか？
もう二度と、この家には戻らない。

両親の車の鍵を掴む。

母親が止める。「お金がないでしょう？」

君は、明日来るはずのハウスキーパー用の現金をつかむ。

車に乗る。

父親が説明する。「その鍵は別の車のものだよ。」

社会科学者たちが家に現れる。

父親が君の後を追う。

君は周囲を見回し、母親の姿を確認すると、

早足で道を進む。

父親がなだめる。

太陽は真上にある。

草の上に座る。

君は父親に話す。「モーターに泊まって、酒を買う。それから、父さんが育った田舎へ行く。」

父親はゆっくり進めと言う。

「俺も準備を進めてる。森の中に静かな場所を作る計画だ。」

君も自分の役割を果たさなければならぬ。

父親をじっと見つめる。

この会話は、ずっと大切に覚えておく。

二人で町を歩く。

アイスクリームを食べる。

港でスムージーを飲む。

ストリートミュージシャンを聴き、スケート

ボードをする若者たちを眺める。

父親が、歩道の壁画の前で横になった二人を

写真に撮る。

やがて日が暮れる。

父親は絵葉書を買ひ、裏にメッセージを書く。

その表情は、諦めたようにも見えた。

君は両親の家の玄関をくぐる。

社会科学者たちが、基本的な質問を投げかけ

る。

君は答えない。

裏口から出る。

父親が追いかける。
君は大通りへ向かう。
車道へ足を踏み出す。
スパイたちがそこら中にいる。
父親が引き戻そうとするが、君は振り払う。
暴力ではなく、ただ君の方が力が強いだけだ。
二人の動きはスローモーションのように見える。
車のクラクションが鳴り、車が避けていく。
女性が駆け寄り、助けに入る。
彼女は数分間、交通を止めようとするが、
次々と車が迫ってくる。
父親が彼女に言う。「社会学者と警備員は
。○番地にいる。」
君は逃げ道を探すが、どこにもない。
数分後、パトカーが二台、赤いランプを回転
させながら道を塞ぐ。
警備員が父親を引き離し、話をする。
君はまだ車道の真ん中に立っている。
警察官たちが懐中電灯を向け、君に質問を投

げかける。
やがて、君は警察車両の中にいる。

キツの父親は疲れ果てていた。社会学者たちは「非常に困難な状況ですね、本当に頭が下がります」と言った。そして、キツの母親が間違った種類の警察に通報したのだと説明した。それが遅れの原因だったらしい。もしまた同じことが起こったら、今度は地元警察ではなく警視庁に連絡するように、と念を押された。キツの父親は彼らを呆然と見つめた。間違った種類の警察？彼は首を振り、ゆっくりと家へ向かった。途中、見知らぬ人が声をかけてきた。「さっき、道であの男と揉めましたね。あれ、何だったんです？」

キツの両親は、東京の病院の監禁病棟でキツと面会し続けた。いつものことだったが、細部は毎回少しずつ違っていた。

キツが病院にいる間、父親はリモートワークのために中国へ渡った。大手のグラフィックデザイン会社との仕事だった。キツに電話をかけることはできなかった。

「電話をかけるのも、受けるのも許されていない。」

キツは何度もそう繰り返した。

キツが三週間後に解放されると、父親はビデオ電話をかけた。

「退院できてよかった。」

そう言うのと、キツは短く答えた。

「手紙を書いたんだ。すごく大事なことが書いてある。あの時話したことについて。」

「声に出して読んでくれるか？」

キツは口をぎゅっと閉じ、ゆっくりと首を振った。

「この電話は安全じゃない。戻ってきたら。」

7月18日

お父さんへ

説明するのが難しいんだけど、あいつらに脳細胞を傷つける薬を飲まされて、前とは違う感じになってしまった。でも、一名前一本の本当の計画について話したあの日は、人生で最高の日のひとつだった。今は悪化してるけど、お互いに頭を使えば、まだ何とかなれると思うんだ。体をもっと強くして、動物の世話をしたり、色々手伝ったりできるようにするつもり。

「署名なし」

7月26日から27日

お父さんへ

キャプテンの日記より

知っての通り、すべてがめちゃくちゃになった。俺の脳はまだ影響を受けていて、影響し
ていて、影響されていて、影響され続けてい
て。。。最初に話したあのことのせいだ。医者
を信用するのがどんどん難しくなってる。で
も、なんとか立て直そうとしてる。計画はあ

る。大きな計画があるんだ。でも、声に出して話すのがどんどん難しくなってる。毎日、少しずつお父さんのことが恋しくなる。俺が本当にしたいのは、すべてから消えること。でも、同時に「普通」に戻ることに、つまり、自立とか運転とか、そういう大事なことをやるようになること。でも、脳が死んでしまふのが怖い。俺は自立したい。必要なんだ。ぶるぶる、ぶるぶる、ぶるぶる。俺の気分はそんな感じ。もっと賢くなろうとしてるけど、前みたいにはいかない。話すことも、前みたいにできなくなってる。ごめん。祈ってくれ、宇宙のお父さんへ。

「署名なし」

7月31日

何かが間違った！チューンナップでもして、また前みたいにおしゃべりできたらいいのに。もしすべてがスムーズに進めば、森の暮らしもまだ可能かも。外国語のコードで話せる気

がするけど、＝あること＝が終わるまでは試すのが怖い。

昔みたい、目を輝かせて、何か新しいものが角を曲がるたびに待っている、そんな自分が恋しい。走ることと夢を見ることが、ぐちやぐちやになって、区別がつかなくなってしまった。特に、まだ目を覚ますべき時じゃないとを感じるから。＝あること＝のせいで。でも、尊敬してるから、ごめんなさいって言いなかったんだ。お父さんといると、俺の中になくしたくなかった部分が戻ってくる。もっと部屋の外に出たい。もっと自立に向けて動きたい。悪い習慣はもういらぬ。引越す前にやること..

シャワーを浴びる

運転する

くすり

「消された文字」

6月

6月

6月？

一日本地図の手書きの旅程一

持ち物を減らす。古いものは燃やすかも。

シャツ5枚、フランネル4枚、ズボン1本、

ノート、サングラス、歯ブラシ、レコードプ

レイヤー、ネックレス、ブーツ、スニーカー

「署名なし」

幽霊は黙々と家の仕事をするようになった。

料理や掃除のほとんどを引き受けたが、父親

が肉を食べた皿には手をつけなかった。庭の

雑草を抜き、煙探知機の電池を交換するのを

手伝い、屋上に鉢植えを並べた。

幽霊は精密なカレンダーを作り、11月9日を

中心に据えていた。その日、幽霊は高山へ移

ることになっていた。それまでは決められた

日課を守った。起床、朝食、サイクリング、

絵を描く、草むしり、昼食、ぼんやりする、

両親からの提案を受ける、夕食の準備、夜の

散歩、デザートにミルク一杯、就寝。その決

まりきった流れは何か根本的な意味を持って
いるようだった。

キツの両親は、幽霊を日常の活動に加えた。
ある日、父親は幽霊を連れて、新しい東京の
オフィスに置く椅子を買いに出かけた。信号
待ちの間、別の幽霊がショッピングカートを
押しながら交差点を横切り、車の前で立ち止
まった。

「スペースを空けてくれなかったのか？」そ
の幽霊が言った。「俺には車がないんだ。お
前にはある。それなのに、考えもなかった
のか？」

父親は思った。「スペース？どこに？」十
分なスペースがあったはずだ。しかし、すぐ
に幽霊を突き放すのではなく、その言葉の論
理を考えた。

夜の散歩の途中、落ち着きを失った幽霊は腕
を振り始めた。その動きとともに、指先にか
すかに桃色が差し始めた。幽霊は下を向かず

前を見据えて歩くようになった。壁をすり抜けるのをやめ、きちんとドアを通るようになった。

キツの両親は、この変化が何を意味するのか考えた。そして、自分たちが経験してきたことについて。ずっと取り憑かれているような気がしていたが、それは最初から幻だったのだろうか？ その問いに対する答えはいくつもあった。一つの答えは、ある日、スーパーの野菜売り場で得られた。キツの母親が幽霊と別々に買い物をしていると、一人の女性が入り込んで手をしながらそっと囁いた。

「うちの子も、幽霊なんです」

キツは、ほとんどの機能を回復した。カレンダーに記された手順を一つずつ実行した。「携帯電話メーカーを確認する」の日が来ると、番号の再開手続きを取り、母親が手配した科学者を解雇し、新たにもっと扱いやすい専門家を雇った。積み上げた古いノートを整

理し始めた。「運転」の日が来ると、父親の付き添いで運転を練習し、その後は一人で運転するようになった。朝の自転車の距離も伸びていった。夜の散歩は変わらず両親と続けた。

すべては、高山へ戻るためだった。

「一人で暮らしたい」

キツは、高山の昔のセラピストと面談を予約し、春学期の履修登録を進めた。さらに、翌年の夏に大学編入のための再出願について特別相談を申し込み、一年後の入学を目指した。動きはまだ硬かったが、適切な場面では笑顔を見せ、握手も交わせるようになった。

「ジョークを言ってみろ」父親が言った。

「スケルトンがバーに入って言った。ビールとモップをくれ」

発音は完璧だった。

しかし、母親は言った。「名古屋へ行ったときと同じね」

彼女には、良い未来が思い描けなかった。そ

れでも、キツが一人で生きていけることは認めざるを得なかった。

高山へ引越す。授業に通う。すべて順調だ。ただ、声が消えない。声を静める唯一の方法は、電気療法。両親は週に一度、高山へ飛び、病院まで車で送ってくれる。

学期が終わる日、アパートのドアを開け、そのまま東京行きのバスに乗り。持ち物はすべて置いていく。もう二度と戻らない。友人の家に転がり込む。彼女は玄関に包丁を置いていく。

今、東京の中心、新宿区にいる。雨が降っている。パートナーに追い出された。

閉店間際のカフェの前に立っている。古い本能が蘇る。電話をかける。

お母さんが来ている。何かがおかしい。眉をひそめる。

「なんてこと……」お母さんが言う。「なん

てこと、なんてこと……」

今、施設の休憩室にいる。テレビがついてい
る。音量は最大。ニュースもスポーツも、す
べて録画のループだ。

「来てくれてありがとう」落ち着いた声で言
う。無感情で話せば、言葉は出せる。抑揚を
なくせば、誤解もない。

「ちゃんと食べてる？　食事、大丈夫？」

「外に出たい」通りかかったスタッフに言う
顔は上げない。

スタッフは足を止める。「いいよ。でも今、
退所の手続きをしている患者さんがいる。そ
れが終わったら外に出られるよ」

ロックされたドアを見る。その先は、四方を
金網で囲まれた中庭。天井まで金網だ。そこ
にはさらに二つの鍵付きドアがある。一つは
出口のない金網のバスケットコートへ、もう
一つは小さな庭へ。その先には――どれほど
の鍵と警備員を通ればいいのかわからないが
――外の世界がある。道路、そしてバス停。

退所する患者はサチ。知っている。陽気な子だ。バス停のことを聞いていた。迎えに来る人はいない。

体が痛い。大きなプラスチックの椅子が固い。お父さんが椅子を引き寄せようとするが、床に固定されていて動かない。誰もが互いに距離を置いて座っている。

「ソーバリービングの施設が必要」小さな声で言う。

「え？」お母さんが聞き返す。「聞こえない」彼女は周りを見回し、スライド式の窓へ歩いていく。「テレビを消してもらえますか？」とナースに頼む。ナースは音を消すが、映像はそのままだ。

「ソーバリービングの施設が必要」もう一度、言う。

そこなら助けてもらえる。でも気に入らなければ、出ていくこともできる。

「ソーシャルワーカーが言ってた。あなたの問題は精神的なものなのか、それとも依存症

なのかって」お母さんが言う。
答えない。一人一人の顔を見つめる。何かがおかしい。
別の女性が足を止め、名乗る。見たことがある。バッジと鍵を持っている。
「ヨウコさんのご両親ですか？」彼女はあなたの死んだ名前を呼ぶ。ほとんどのスタッフはカルテに書かれた名前を使う。その名前を聞いたたびに、部屋へ戻って閉じこもりたくなる。
「はい」お父さんが答える。
「よくなってきてると思いますよ。私は火曜と木曜に來ています」
「それはよかった。ここ数日通ってるんですけど、お会いしませんでしたね」
「私は火曜と木曜だけですから」スタッフが繰り返す。
彼らの言葉は意味をなさない。大事なものは体の動き。お父さんの肩がわずかに下がる。ほんの少しだが、あなたには分かる。そもそも

なぜお父さんはここにいます？
カルテにはいろんなことが書かれている。一番上には死んだ名前。次に、薬の種類と量。ナースがそれを読むときが分かる。クロザピン、オランザピン、アセナピン――抗精神病薬。ラツィダ。
違う。欲しいのはアデロールだ。アデロールがないと、体が止まり、沈黙する。
もう出ないと。
「その施設、クラリティっていうの。良さそうよ。調べて電話したの」
嘘だ。本当は、お母さんは家に連れ戻したいだけだ。なのになぜ、次の施設の話ばかりする？
両親の家、あの部屋。エネルギーが悪い。声が住んでいる。前にいた場所。
罪は犯していない。裁判もなかった。ただ、プリンターから吐き出された紙に三つの署名が並んでいただけ。そして、ここにいます。

「弁護士が必要」そう言う。
お父さんはたぶん考えている――「前の施設では弁護士がいた。裁判をした。電気療法に反対した。でも、全体の目標がなかった――」
「だが、全体の目標という言葉は、もう自分の語彙にはない。」
代わりに、お父さんはこう聞く。「先生とはうまくやってる？ 仲良し？」
お父さんが笑うので、つられて笑う。お父さんは面白い。
「まあ、そんなでもない」
コンクリートのバスケットコートにあるベンチに座る。両親が話しかけてくる。こんな遠くまで来たのだ。
脳がちゃんと働いていないことはわかってい。脳震盪を何度も起こした。消化器系もおかしい。この数ヶ月の記憶が抜け落ちている。
「本当に心配なのよ」お母さんが言う。「路上で寝るなんてダメよ。ここに来る前、何時間も歩いて、気づいたら繁華街にいたのよ」

ね？　危ないわよ。閉店間際のカフェから電話してきたでしょ？　雨の中で。バッテリーが切れそうだった。私、カフェを一軒ずつ回って探したのよ」

彼女は、タカヤマのアパートの荷物を片付け、契約解除のために大家に違約金を払った話をしている。でも、その件は自分で何とかするつもりだった。毒カビさえなければ。アパートで眠れず、北のビーチ沿いの町で車中泊をしていた。でも、車にもカビを見つけた。荷物の半分をレンタルトラックに積んだ。レンタル会社から何度も電話がかかってきた。トラックをどこに置いたか覚えていない。トラックの場所を突き止めるのは、やるべきことリストの一つだ。

「気分はどう？」お父さんが聞く。

「脳のスキャンが必要」

ポケットから、自分で書いた物語を取り出す。声に出して読む。「自分のどうしようもない人生」のエピソード。路上で誰かと出会った

その人は自分よりもさらに酷い状態だった。
ディスカウントストアへ連れて行き、セータ
ーを買ってあげた。彼は断酒を破り、バーで
一杯飲んだ。夜通し話し、夜明け前に二人で
埠頭まで歩いた。朝日が昇った。それは美し
い瞬間だった。

疲れた。

「来てくれてありがとう」立ち上がる。腕を
体の横に垂らし、片手の手首をひねる。これ
は「さようなら」のサイン。

「まだ来たばかりよ」お母さんが言う。

彼らは座るよう説得する。もう五分だけ話し、
それから再び立ち上がる。また手首をひねる。

帰りの車の中で、両親は今日の会話を振り返
る。意味がないとわかっている、やめられ
ない。

「昨日もあんな感じだった？」と父親が聞く。
「だいたいね」母親が答える。「じっと私を
見つめて、こう言ったの。『ひとつ質問して

もいい？　パパって、昨日、精神科病棟を丸ごと一日借り切った？』

父親は額をこすり、車窓の外を眺める。

母親は続ける。「私は『そんなことするわけないでしょ』って言ったわ。」

「そうだな」父親は言う。「実は昨日、本当に精神科病棟を丸ごと借り切ったんだよ。」

「は？」

「すごく高かったけどな。普通の医者と看護師を全員入れ替えて、俳優を雇って、脚本まで用意したんだ。」

「そんなわけないでしょ。」

「そんなわけない。」